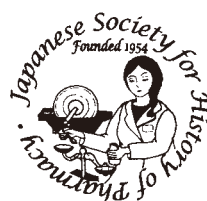


薬史レター



第 62 号

日本薬史学会

J S H P

2012 年 3 月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

日本薬史学会 2012 年の行事

4 月よりの新事業年度を迎えるにあたり、下記の総会関連行事を開催致しますので、会員の皆様、万障繰り合わせの上御参集下さるようお願い申し上げます。

日時および場所	2012 年 4 月 21 日(土) 東京大学薬学部総合研究棟		
	12 時 30 分 ~	理事、評議員会	10 階大会議室
	14 時 ~	総会	2 階講堂
	15 時 30 分 ~	公開講演	
		1. 私の放射化学研究の事始め (元昭和薬大教授) 田中 彰	
		2. 世界女性化学賞とわが国の女性科学者 (神戸大特別顧問) 相馬芳枝	
	18 時 ~	懇親会	山上会館 (会費 ¥4,000)

第 5 回日本薬史学会・柴田フォーラムのお知らせ

日時および場所	2012 年 8 月 4 日(土) 東京大学薬学部総合研究棟 10 階大会議室		
	14 時~17 時		
	演者、演題については決定次第告知します。		
	懇親(談)会		

秋の年会のお知らせ

日 程	11 月 17 日(土)		
場 所	東京大学薬学部総合研究棟 2 階講堂		
年会長	東京大学大学院薬学系研究科 特任教授 津谷喜一郎		
	演題申込み、締切日などについては次号に掲載		

日本薬学会 第132年会での薬史学関係の発表

3月29日 午後

P1会場 体育施設第一体育館(ポスター発表)

・薬学史

29P1-pm155 日向薬事始め(その13) - 日向における種痘の歴史再考(I)

○山本郁男^{1,2}、岸信行^{2,3}、宇佐見則行⁴ (¹九州保福大薬、²九州保福大・QOL研、³宮崎・日向・富高薬局、⁴奥羽大薬)

3月30日 午前

E13会場 高等教育推進機構(一般口頭発表)

・薬史学・その他

30E13-am13S 医療文化に根差した江戸期インフルエンザパンデミック治療戦略の検証

○島田佳代子¹、高橋京子^{1,2} (¹阪大院薬、²阪大博)

日本薬史学会2011年会(名古屋)開催を終えて

大会長 河村 典久

日本薬史学会2011年会を開催するにあたり、学会員の皆さんから多くの演題が寄せられ、お陰をもちまして年会を無事果たすことが出来ましたことに対して、まずは、感謝とお礼を申し上げます。

東海支部長の奥田潤先生より2011年会を名古屋の金城学院大学で開催するようにご指名がありました。とても名誉なこととおもい、開催することを受諾いたしました。早速大学内で開催に向けて話し合いを設け、1年以上前から、はじめに日程を決めて準備に取り掛かりました。最も苦労したのは、金城学院大学が名古屋のどこにあるのか、大学までのアクセスがどうなっているのかを、皆さんに紹介することと、二日目の見学会をどうするのかとすることでした。金城学院大学薬学部は、2005年に設置されてまだ間もないことで、殆ど知られていないことでした。

二日目の見学会については、東山植物園、くすり博物館、犬山の歴史資料館など、名古屋地区での薬史学会の会員の皆さんがすでに殆どの施設を見学されていたことでした。そこで、私自身が以前から時々訪問していた岩瀬文庫での見学会が行えるかどうかについて、岩瀬文庫の林知左子学芸員と打ち合わせたところ、なんら問題なく対応していただけることとなり安堵しました。

開催日程と講演申込み、参加申込み要領が出来上がったのは2011年4月頃でしたが、日本薬史学会の「薬史レター」に原稿を載せていただいてからは、どれだけの参加者、演題申し込みがあるかなど気を揉んで居りました。

次に悩んだのは参加費の徴収でした。事前に参加費を頂いておけば、参加人数などはっきりを把握できるのですが、郵便局などの金融機関が近くになく、会費振込のたびごとに確認をすることが困難な状態であることが予想されたことなどから、薬史学会の皆さんを信頼して参加費の徴収は学会当日

とさせて頂きました。

大学内の役割分担は、大会長を河村が引き受け、事務局長を薬学部の野々垣教授、学会運営を永津教授にお願いすることで学会の運営を行うことにしました。

講演申し込みは2010年会のことを参考にさせていただき、口演時間を決めていました。嬉しいことに予想よりも多くの発表申し込みがありましたので、それまでは発表時間を1題20分としていたのを、急遽15分とさせていただき、発表者にお詫びをすると共に、協力をお願いしました。また、演題の都合でポスターセッションに移行していただいたこともあって、特別講演2題、一般口演16題、ポスターセッション7題となりました。各演題についてはあとに掲載いたしました。

学会の2週間ほど前になって参加者の概数がほぼ確定し、懇親会の参加人数の把握と昼食の数の確定を、食堂の担当者と打ち合わせながら、前日に会場の最終設営を行うことが出来ました。幸いなことに、大学からは学会会場とするための教室は、日頃から使用している教室で施設整備等をなんら問題なく使用できることでした。

学会当日になってすべて準備が整ったと思っていたところ、またまたハプニングが起きました。理事会と評議会への参加者の把握ができていなかったことでした。参加者名簿と日本薬史学会名簿からおおよその見当はつきましたが、当日参加の役員の数がわからなかったことでした。もう一つのハプニングは、学会直前に判明したことです。同日に会場に充てた9号館でもう1つ(別の)の学会が行われることでした。幸いなことに会場はすでに1年前から予約しておりましたので、問題はなかったのですが、参加者の皆さんには戸惑いが見られ、名鉄瀬戸線の「大森金城学院前」から会場までの道案内が充分ではなかったことに改めてここでお詫び申し上げます。

学会の運営は永津教授の下、アルバイトの学生の献身的な協力で進行していきました(写真1)。参加者は総勢74名でした。特別講演は、印籠の著書で知られている服部先生にお願いいたしました。先生は、既に薬史学会の支部などで印籠の話をしておりましたので、今回はくすりの包装についての内容に重点をおいていただけるようにいたしました。もう1題の特別講演は、私が日頃から古文書の解説でお世話になっている遠藤先生で、最近取り掛かっておられる宇田川榕菴の内容になりました。

ポスターセッションは7題で、ロビーでの活発な意見交換が行われました(写真2)。金城学院大学に薬学部が設置されたときに整備された『本草図譜』について、他資料との比較をテーマに薬学部の学生も発表してくれて華を添えてくれました。この『本草図譜』は、金城学院大学図書館の協力の下で資料展示を行うと同時に、河村の私蔵本ではありますが『ドドネウスの草木譜』1618年版を展示いたしました。時間の合間にたくさんの参加者に見てもらいました。

一般口演発表は16題で、それぞれ、座長の先生の協力で大幅な延長もなく、18時からの懇親会へとつなぐことが出来ました。しかし、懇親会の進行が気になっていたために、閉会の辞の折に、次期開催の会長紹介を忘れておりました。次期開催の先生に大変にご迷惑をおかけいたしました。この件は後日、山川会長からお叱りを受けることになった次第です。

懇親会は学会会場のとなりの食堂で行いましたが、多くの方に参加して頂き、また、山川会長から次回開催の案内をしていただき、和やかな雰囲気のもと無事終了することが出来ました(写真3)。

翌日、学会参加者のうち、16名の方が愛知県西尾市亀沢町480に建つ「岩瀬文庫」を訪れました。この図書館は、明治41年に西尾市の実業家であった岩瀬弥助が、本を通した社会貢献を志して創設した私立図書館として誕生し、戦後に西尾市の施設となり、平成15年4月に日本初の「古書の博物館」としてリニューアルし、19年12月7日に登録博物館となり、20年5月6日には創立100周年を

迎えています。重要文化財をふくむ古典籍から近代の実用書まで、幅広い分野と時代の蔵書約8万冊を保存・公開し、日本の本の長い歴史やゆたかな文化について体験しながら学べるユニークな展示を行なっています。

当日の企画展示では、「日本人とくじら～岩瀬文庫資料に見るくじらとの関わり～」が開催されていて、司書の林さんから説明を受けました。また、装丁した書籍の取り扱い方などの説明では学ぶべきことが多くありました。参加者のうちの数名が蔵書閲覧の予約をしていただいております。学会会場とは違って和んだ雰囲気の中に二時間が過ぎ現地解散となりました。

改めて、会員の皆様に感謝いたします。

なお、掲載の写真は五位野先生からいただいたものです。

最後に、大会運営に際し、日本薬史学会本部から運営費と、金城学院大学から学会補助、及び学会参加者から参加費、懇親会費など、収支を行いましたところ、殆ど残金なしで終了することが出来ました。ここに、学会開催にあたりまして学会会員の皆さんに感謝すると共に至らなかったことをお詫び申し上げます。

(文責 野々垣常正)



(1) 学会会場風景



(2) ポスター会場



(3) 懇親会の様子

プログラムを以下に掲載します。

日本薬史学会2011年会(名古屋)プログラム

9:30	10:00	10:05	11:05	12:10	13:10				
受付	開会	一般講演 O-01~O-04	特別講演 S-1	理事・評議員 合同会議					
					13:00	14:00	15:00	18:00	20:00
					ポスター発表 P-01~P-05	特別講演 S-2	一般講演 O-05~O-14	懇親会	

受付開始(9:30~)

開会の挨拶(10:00~10:05)

日本薬史学会 2011 年会長 河村 典久

一般講演発表

口頭発表 1 (10:05~11:05) (W9 号館 106)

座長 永津 明人

O-01 「在鮮日本人薬業回顧史」(昭和 36 年刊)について ————— 石田 純郎

O-02 宗教史に見出される薬と薬壺 ————— 奥田 潤

O-03 医と薬の相克、薬と薬の確執

-19 世紀イングランドにおける apothecary, Chemist & druggist- ————— 柳澤 波香

O-04 薬学教育改革における医療薬学の受容 ————— 赤木佳寿子

特別講演 1 S-1 (11:10~12:10) (W9 号館 106)

座長 永縄 厚雄

印籠と薬 - 江戸時代の薬と包装 ————— 服部 昭

日本薬史学会 理事・評議員合同会議(12:10~13:10) (W9 号館 2 階 205)

一般講演発表

ポスター発表(13:10~14:00) (W9 号館ロビー)

P-01 インドの薬学の父 Mahadeva Lal Schroff ————— 夏目葉子他

P-02 生薬としての玳瑁(2) ————— 多胡 彰郎

P-03 わが国の医療機器および理科学機器取扱いの変遷

- 医療用ガラスから理科学ガラスへ - ————— 宮崎 啓一

P-04 金城学院所蔵『本草図譜』と他資料との比較研究 山草部、芳草部 ————— 野村知世他

P-05 金城学院所蔵『本草図譜』と他資料との比較研究 毒草部 ————— 山田ゆきの他

P-06 印葉図保存による金城学院大森キャンパス内の植物調査 ————— 上野伶緒他

P-07 ハンセン病の薬学的キリスト教文化研究 ————— 野田 康弘

特別講演 2 S-2 (14:00~15:00) (W9 号館 106)

座長 河村 典久

宇田川榕菴の西洋植物学受容過程について ————— 遠藤 正治

口頭発表 2 (15:00~16:00) (W9 号館 106)

座長 飯田耕太郎

O-05 連翹の基原について~成分からの一考察~ ————— 西部 三省

O-06 佐渡の“よろけ”治療薬「紫金丹」と石見銀山・中村家処方メモ「萬金丹」 ————— 成田 研一

O-07 ①『傷寒論』・『金匱要略』における昼夜の服用法の意義 ————— 鈴木 達彦

- O-08 コレラの薬盛衰記-芳香散・沸騰散・石炭酸を中心として- _____ 萩原 通弘
口頭発表 3 (16:00 ~ 17:00) (W9 号館 106) 座長 野々垣 常正
- O-09 医薬品の一般名に関する考察:(1)命名の手続きと規則 _____ 三澤 美和
- O-10 WHO 必須医薬品モデルリストをみる血漿分画製剤の歴史 _____ 坂上 裕一郎
- O-11 光学活性医薬品・関連技術の歴史の変遷-その1-アミノ酸の光学分割史- _____ 吉岡 龍藏
- O-12 わが国のアミノ酸系医薬品開発 50 年の変遷(その4) -タンパク系製剤- _____ 荒井 裕美子
口頭発表 4 (17:00 ~ 18:00) (W9 号館 106) 座長 藤井 広久
- O-13 日何薬(くすり)事始め(その12)
 -明からの二人の帰化医人、何欽吉と徐之遴並びにその周辺- _____ 山本 郁男
- O-14 ヨーロッパ中世初期における薬草使用と剤形に関する考察 _____ 田中 玉美
- O-15 清代湖南省湘潭の薬材商人について _____ 石川 晶
- O-16 リヨン(フランス)の医薬品産業:その歴史と他産業によるイノベーション
 _____ ジュリア・ヨング

次年度年会長挨拶

閉会の挨拶

日本薬史学会 2011 年会長 河村 典久

懇親会 18:00 ~ 20:00 W7 号館 2 階

日本薬史学会 2011 年会 (名古屋) 参加報告

飯田 耕太郎、奥田 潤 (名城大学薬学部)

日本薬史学会 2011 年会在 11 月 12 日に金城学院大学薬学部河村典久教授を年会長として同大学で開催され、翌日の 13 日には愛知県西尾市立図書館の「岩瀬文庫」の見学会が開催されました。

年会は特別講演 2 題、口頭発表 16 題、ポスター発表 7 題の合計 25 講演が発表されました。演題は多岐にわたっており宗教、薬業、国際、教育、生薬(植物)、医薬品(治療薬)に関する発表があり内容的に興味深いものでありました。

特別講演は、くすりの携帯用具としての「印籠」についてご研究されている服部昭先生の「印籠と薬-江戸時代の薬と包装」、近世の本草学を研究されている遠藤正治先生の「宇田川榕菴西洋植物学受容過程について」の講演がありました。遠藤先生は、名古屋市東山植物園の伊藤圭介文書研究会を主導され、わが国で初めてリンネの植物分類を取り入れた「草木図説」をまとめた飯沼慾齋に関する「慾齋研究会」でご研究されています。今回は最近のご研究の中から宇田川榕菴の研究についてご講演されました。また本会では金城学院が所蔵している「本草図譜」写本と 1618 年版のドドネウス「草木譜」の特別展示がありました。本草図譜は金城学院に薬学部が設置されたときに新たに収蔵された図譜で、とてもきれいな色彩の写本で、学会開催を記念して図書館で初公開されました。

13 日は、西尾市の西尾図書館に隣接している「岩瀬文庫」を見学しました。岩瀬文庫は、岩瀬弥七が貴重な資料の散逸を憂慮して自費を投じて全国から集めた貴重な資料を収集した文庫です。資料としては、2005 年に開催された愛地球博での高木春山の「本草図説」を所蔵しており、薬学に関する貴重な資料を閲覧することができました。

五史学会(2011)参加記

東京海道病院 五位野 政彦

前日の雪と寒さが嘘のような快晴の12月10日(土)、例年恒例の五史学会講演会が行われたので報告する。

会場はいつも通り順天堂大学医学部9号館2階8号室であった。医療関係五分野の歴史研究の発表には100名弱の参加者があった。(参加費200円)

14:00開始。進行は下記のとおり。

(1) 日本医史学会：深瀬泰旦「お玉ヶ池種痘所あれこれ」

幕末に伊東玄朴らが開いた「お玉ヶ池種痘所」に関する記録と、そこに携わった83名の蘭方医などについての報告であった。演者は5名の医師について、今まで知られていなかった背景の調査を話された。

(2) 日本薬史学会：平林敏彦「切手で辿る薬学の歴史」

切手はその時代を映し出す証人でもある。平林会員は薬学、医薬品あるいは化学、医学などが登場した世界各国の郵便切手を紹介し、その時代背景などを論じた。

フロアの伊東氏(医史学会)から、「乳棒・乳鉢」の語源についての質問が出たが、五位野が「はっきりとした由来等は不明である。日本のものと欧州のもので形が違う理由も不明である」旨の回答を行った。

(3) 日本看護歴史学会：田中幸子「占領期における日本の看護改革～保健婦助産婦看護婦法の改正をめぐって～」

第二次大戦前と大きく変わった看護婦制度について、新しい看護婦資格、養成制度などがどのような背景のもとに決まっていたかの報告であった。この報告にはフロアからも活発な意見交換がなされた。

15分の休憩をはさんだ後の次の2題は、

(4) 日本歯科医史学会：西巻明彦「口歯類要」における口歯の意味的考察」

我が国には、西洋医学的な意味での「歯科学」はなかった。「咽喉歯科」というような考え方の治療、書籍があったことを紹介した。歯科医師国家試験における歯科医学史の設問などにも触れた。

(5) 日本獣医史学会：中山裕之「新たに判明した忠犬ハチ公の死因について」

渋谷駅のハチ公銅像は、東京でもっとも有名な待合せ場所となっている。「ハチ公」の死因についての報告である。

従来、死因はフィラリア感染症によるものとされてきた。しかし東京大学農学部ホルマリン標本として保管されているハチ公の肺組織を顕微鏡的検査をしたところ、ガン組織とみられる病理像が認められた。巷間伝えられる「焼き鳥の



串が胃に刺さった」というのも間違いであり、おのおの 5cm ほどのものがハチ公の胃の中に 4 本あっただけである。

ここでは五史学会と呼んでいるが、正しくは「日本医史学会・日本歯科医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・日本看護歴史学会 合同 12 月例会」である。1993 年に医史学会と薬史学会との合同例会として始まり、獣医史学会、歯科医史学会、看護歴史学会の順で参加団体が加わった。獣医史学会の関係者からは、この五団体の名称順を参加の順序にすることなどの希望も出された。

17:30 からは会場を順天堂医院 1 号館内のレストランヒルトップに移し、懇親会が行われた(会費 6000 円)。

本会からは山川会長が挨拶を述べ、「各分野の話聞くことは知的な刺激であり、医療の進歩をいろいろな視点で見ることができる会である」と、この例会を評した。

会の終了時に、不肖五位野が薬学校生の伝統的な踊りである「たにし踊り」を披露した。医療関係の歴史研究者でもこの踊りを見たことがない方もおり、にぎやかな宴となった。18:40 散会。

PARKE-DAVIS 社「絵で見る薬学の歴史」 デジタル復刊に寄せて。

東京海道病院 五位野 政彦

このたび、ファイザー株式会社から「薬学の歴史：GREAT MOMENTS IN PHARMACY」の CD-ROM が発行されました。その内容をご紹介します。

長く薬史学会の会員を続けていられる方の中には、1960 年に米国 Parke Davis 社が作成した画集、“A HISTORY OF PHARMACY IN PICTURES” のことを覚えておられる方もいらっしゃるでしょう。

これは絵と英文 2 行の解説による 40 枚の薬学史教材です。内容は、古代の薬物治療に始まり、バビロニアや古代中国の医薬品、エジプト、ローマ、中世アラビアや中世における医薬分業の開始、薬局方の作成などが描かれているものです。さらに近代薬学史の分野では、米国を中心にした薬剤師の活動、薬学教育や医薬品産業の勃興などを経て、現代(1950 年代当時)のまさに新規医薬品開発の黄金期までの薬学の歴史を表現しています。現在でも名古屋の名城大学薬学部にはこの絵画が掲示されています。

同社は 1970 年に同じ米国の Warner-Lambert 社に吸収されており、さらに 2000 年にはこの Warner-Lambert 社が Pfizer 社に買収されています。この図版の著作権は米国薬剤師会財団 (APhA Foundation) に寄贈されています (APhA Newsroom, 2007 年 10 月 22 日)。

そして今回、この図版が“GREAT MOMENTS IN PHARMACY”として日本語版でデジタル化 CD 化されました。それがこの「薬学の歴史：GREAT MOMENTS IN PHARMACY」です。米国薬史学会 (American Institute of the History of Pharmacy) のあります米国ウイコンシン州立大学マジソン校のウェブサイトでは、すでに同名のタイトルで図版と解説(英文)を見ることができます。しかし、このたび日本語でこの図版を見ることができるようになったことで、薬学史研究者のみならず一般の薬剤師のかたがたも「薬学」というものの歴史と存在意義を感じることができ

ることになるでしょう。また、ある意味レトロなこれらの絵画は高校生に大きな興味を持ってもらえるかもしれませんが（しかし「古代中国の薬学」という図は、当時のアメリカ人のアジアに関する基本知識の欠如などが感じられる点で興味深いものです）。

残念ながらこのCD-ROMには、88頁におよぶ別冊解説がおさめられていません。この別冊には40枚の図に描かれている人物、物など、またその時代背景や引用文献の細かい解説が掲載されています。おそらくこの図版を利用する薬学史担当教員の資料として利用されていたものでしょう。膨大な量を翻訳することの困難さを考えれば省略されてしまったのはしかたがないことでしょうか。

わたくしはこのCD-ROMを第21回医療薬学会年会（神戸）のファイザー社のブースで入手しました。これからも、薬学系の学会のいくつかにおいて同社のブースで配布するようです。一度見ていただくことをおすすめします。

第40回国際薬史学会報告

日本薬史学会理事 辰野美紀

2011（平成23）年9月14日から17日まで第40回国際薬史学会学術大会が、ドイツのベルリン市のベルリン・ブランデンブルク学術アカデミーを会場に開催された。今回は国際薬史学会が創立されて85周年であり、40回目の学術大会（Congress）であり、招待講演5題、研究発表100題強、ポスターセッション54題（当日参加を含め56題）の発表が行われた。

学会会場であるベルリン・ブランデンブルク学術アカデミーの建物は、ベルリンで「最も美しい広場」と称されているジャルダルメン広場（Gerdarmenmarkt）に面して建っている。この広場は、中央に音楽・演劇ホール（ホール前にシラーの像があり、裏に音楽大学がある）、そして向って左側に18世紀初頭に建てられたドイツ大聖堂（第二次世界大戦によって破壊されたが修復されている）と、向って右側にフランス大聖堂（フランス・ユグノー聖堂）を配した壮麗なバロック世界が広がり、現在ではしゃれたレストランやオープンカフェとがこれら歴史的建造物と共存している為、今なお多くの市民や観光客を集めるベルリンの文化・学術・宗教・社交の中心地となっている。

また広場と学会会場の建物は、過去にもそして現在にもベルリンの真中に位置しており、北側は、ベルリンを東西に貫くメインストリートであるウンター・デン・リンデン通り（Unter den Linden）（菩提樹の下通り）である。通りは、ブランデンブルク門（Brandenburg）（1791年に、フリードリッヒ・ヴィルヘルム2世によって建てられた凱旋門。上部に勝利の女神ヴィクトリアが率いる4頭立ての馬車を配している。1989年の東西ドイツ再統一のシンボルとなった場所でもある）から、国立図書館（旧国立学術アカデミー）とアレキサンダー・フンボルト大学（旧フリードリッヒ・ヴィルヘルム大学）、更にシュプレー河の中州の博物館島（世界文化遺産。ギリシヤのペルガモン神殿をそのまま収容した博物館やプロシア・ホーエンツォレン王家の貴重な美術品を収蔵した美術館など、5つの博物館が島内に林立している）、そしてベルリン大聖堂（18世紀初頭の初代プロイセン王のフリードリッヒ1世などの墓がある）まで続いており、道路の中央は菩提樹の並木が植えられている広い遊歩道になっている。（遊歩道の中ごろには、以前は森と湖の町だったベルリンを、世界都市へと発展させたフリードリッヒ2世（フリードリッヒ大王）の騎馬像が建てられている）このような歴史的建造物の他に旧オペラ座や銀座通りの様な多くの老舗の店舗が居並ぶ華やかな通りである。加えて学会会場と広場の

西側は、南北に貫くフリードリッヒ通りである。フリードリッヒ通りは、鉄道や地下鉄の集中する交通の要である上、現在では銀行や国際的企業のビルや世界の高級ブランド店が連なっているが、ベルリンが東西に分断されていた20年前までは、西ベルリンへの鉄道の唯一の出入口であったフリードリッヒ駅には検問所があったので暗くピリピリした雰囲気はただよっていたものだった。今は駅周辺のスプレー河畔には、夏の陽射しを惜しむかのように多くの市民がカフェに集い、砂浜の水浴場が作られ、ビルというビルの窓には美しい花や植物が飾られている。平和であることの大切さ、有難さと共に戦争や紛争のおろかさや悲惨さをこのベルリンの街では今なお随所で痛感させられたと言ってよい。

学会前の9月14日(火曜日)に、午前中に国際薬史学会の役員会がそして昼食後にはデレゲート会議が開かれた。各国薬史学会からその学会構成員200名につき1名の代表デレゲートを国際薬史学会組織委員会に派遣できることで各国薬史学会員の総意を国際学会に反映させようということになっているのである。その会議にはデレゲートとして日本薬史学会から私が出席させていただき、投票・議決権を行使させていただいた。会議は例年通りに会長の挨拶、会計報告、出版部やウェブサイトについての報告、フェロウシップ選考、そしてF.I.P.(国際薬学連合の学術大会と会議、2010年はポルトガルのリスボン。2011年はインドのハイデラバード)での薬史学ワークショップの報告が行われ、そして2012年からの新役員候補者の発表と選考が行われた。新会長には、前回の第39回ウィーン学会の会長を勤めたオーストリアのウィーン大学生薬学教室助教授のクリスタ・クレッター女史(Prof. Dr. Christa Kletter)が選出された。このデレゲート会議での決定は、2日後の学会総会の場で、全出席者により承認された。

その後、学会登録受付が行われ、午後4時からメイン会場である大ホールで開会式が挙行された。ベルリン医師オーケストラグループの四名によるメンデルスゾーンの室内楽演奏の後、今学会のクリストフ・フリードリッヒ会長(Prof. Dr. Christoph Friedrich)(ドイツ薬史学会会長)の開会の辞、国際薬史学会オリヴィエ・ラフオン会長(Prof. Dr. Olivier Lafont)の挨拶に続いてドイツ政府代表の保健・教育・消費者省大臣(選挙の為欠席)、ベルリン自由大学(旧西ベルリン自由大学)副学長、ドイツ薬学会会長、ベルリン薬剤師会会長と国際薬史学アカデミーのステュアート・アンダーソン会長(Dr. Stuart Anderson)の祝辞が述べられた。5時から、会長講演「書籍著作出版者としての薬剤師(Apotheker als Buchautoren)」と題して、今学会のテーマ「薬学と出版物(Pharmazie und Buch)」に合わせて、薬学書・薬史学出版物に関して重要な書籍についての総論と過去・現在・未来にわたる評価についての分析が発表された。国立及び大学図書館や公文書館また薬学史・医学史の研究機関や博物館に現存する書籍と文献等について詳細な情報を得る事が出来、大変興味深く感じた。この日は、その後、スプレー河畔に停泊した船上で、ウエルカム・パーティーが開かれた。

9月15日(木曜日)から17日(土曜日)は、朝9時から午後5時まで、大ホールほか2ヶ所の会場に別かれて研究発表が行われた。16日(金曜日)は隣接した会場に



表彰式が行われたフランス大聖堂

ポスターセッション発表会場が設置された。

私は、エジプト・アラブ・ペルシヤ・トルコなどの民族医・薬学と治療法(Heilkunde)の発表と議論に興味深く聞くことができた。また、スイス・ベルン大学医史学教室長であるフランソワ・レダーマン教授(Prof. Dr. François Ledermann)の「薬局法」についてとイギリス・ロンドン大学衛生学教室のアンダーソン博士の「19世紀帝国主義時代の熱帯医学と薬物」の招待講演から多くを学ぶことができた。学会発表で毎回感じる事であるが、発表後の質問や議論の時間をさえぎらない事である。長引く時は時間を延長しても活発な発表者とオーディエンスのやり取りを尊重する。学会では薬学史研究発表と討論以外を優先してはならないという趣旨に則っているのである。ドイツ・マールブルク大学薬学史教室所長のペーター・ディルク教授(Prof. Dr. Peter Dilg)の発表会場では、扉が閉まらない位の聴衆が集まり、激しい議論が闘わされたのに参加し、本来学会とはこういうものであるべきだと感じ入った。

15日は、フランス大聖堂で、国際薬史アカデミーとシエレンツメダルやマリア・カルメンメダルなどの表彰式が行われた。夜9時からドイツ薬学会・薬剤師会主催の立食パーティーが開かれた。16日は、国際薬史学会総会が開かれ、夕刻からポツダム広場のソニー・センターでディナー・パーティーが開催された。そしてまたたぐ間に、17日の午後の閉会式を迎えてしまった。閉会式では、過去20年間の学会の記録映像(1991年アテネ・1993年ハイデルベルク・1995年パリ・1997年アメリカ・1999年フィレンツェ・2001年ルツェルン(創立75周年記念会)・2003年ルーマニア・2005年エジンバラ・2007年セベリア・2009年ウィーン)が放映され大いに盛り上がった。そして、2013年の9月11日から15日に開催が予定されているパリ学会とフランス薬史学会創立百年(1913年創立)の記念行事についての発表があり、次回の学会での再会を期してそしてそれまでの2年間の研究交流などを約束して別れ難い時間を過ごした。

今ベルリン大会の日本からの参加者は、津谷喜一郎副会長・東海支部から夏目葉子氏(インド薬史学)(三重大学)・田中玉美氏(中世薬史学)(名古屋大学)と大阪大学の内野花氏(江戸時代の女性論)・学習院大学の石川晶氏(中国医薬学史)そして私の六名であった。



薬史アカデミーのDiplomaとメダル授賞式にて
…フランス大聖堂内



日本からの国際学会参加者

徳久和夫理事 逝く

高橋 文

日本薬史学会理事、石川県薬剤師会前会長の徳久和夫先生は、昨平成23年9月9日急逝されました。享年79歳でした。

徳久和夫先生(以下、徳久氏と記す)と私は金沢大学時代の同級生であり、席も隣であり、また研究室も同じであったので、入学時から卒業時までいつも近くにいる親しい友人同士でした。卒業後の夫々、金沢と東京に住んでいた五十余年間は、電話、手紙また会って話を交わし心友として理解し合っておりまして。このような関係が途切れる日が来ることを、私は全く予想しておりませんでした。

薬局を開業しておられた徳久氏は、常にその地盤をもとにしてあらゆる方向に話を展開されました。県薬の仕事は卒業以来努めておられましたが、時とともに「医薬分業の推進」に心血を注いでおられることが、ひしひしと伝わってきました。石川県薬剤師会副会長の綿谷小作先生が県薬レポートに「徳久和夫先生の横顔」として平成19年当時の徳久氏の簡単な経歴を書いておられますので、ここに引用させていただきます。

「昭和30年金沢大学薬学部卒業。徳久薬局経営。石川県薬剤師会会長、石川県学校薬剤師会会長。北陸大学客員教授、元金沢大学臨床教授、石川県立看護大学非常勤講師。旭日双光章、藍綬褒章、厚生大臣・文部大臣表彰など受賞。75歳。また北陸学校保健会、日本薬学会、日本東洋医学会、日本薬史学会等に所属。」

ここでは私は、日本薬史学会との関係を中心にのべさせていただきます。

徳久氏の薬史学会での最初の発表は、金沢で行われた日本薬学会第116年会・薬史学部会(金沢大学工学部、平成8年3月28日)、シンポジウム・北陸の薬史での「明治初期金沢における新興薬舗主の軌跡」です。翌平成9年の薬史学雑誌32巻1号に論文として投稿、その別刷を同級生40名全員に送付しております。この中で、それまで「加賀三味薬」に代表される御三家を頂点とした金沢薬業の伝統と文化は明治以降も培われてきた、という定説を翻して、金沢における薬局および開局薬剤師の原型は明治期新興の薬舗主であったと考察しており、開局薬剤師徳久和夫氏の熱っぽい息吹が伝わってくる内容でもあります。

平成21年11月には徳久和夫氏を年会長に薬史学会年会が金沢で開催されました。薬史学会会長の山川浩司先生は、日本薬剤師会の常務理事でもありましたので、恐らく日本薬剤師会の各種会合で徳久氏と知り合っておられ、当時薬史学会評議員であった徳久氏を会長に金沢での年会を提案されたと思います。思わず私はバンザイと叫びたいようなご推挙でした。平成17年東京で徳久氏と会ったときに、珍しく分業論を短縮して金沢大学名誉教授板垣英治先生のご研究に話を集中され、明治期金沢医学館に雇用されたオランダ医師のスロイスとホルトマンの医学講義について、嬉しそうに語られました。帰沢後は早速、「化学史研究」106号、107号に掲載された板垣先生の研究ノートコピーなどを送ってくれました。送り状の日付は平成17年9月19日、この年11月1日オープンの新店舗(とくひさ中央薬局)設立準備の多忙中にも薬史学への興味を抱き続けている熱意が伝わってくる手紙が同封されておりました。

金沢年会は21年11月7～8日の両日、金沢大学自然科学本館で開催され、特別講演の一つは板垣英治先生の「スロイスとホルトマンの基礎医薬学講義」で徳久氏が座長を努められました。ここでは板垣先生の、「日本における近代化学の始まりは従来から言われている大阪・舎密局ではなく金沢・

医学館であった」というご発表が大きなインパクトを与えました。二日目の医薬史跡探訪ツアー、市民公開講座などを含めて、この年会については、薬史レター 54 号、55 号や 2009 年会講演要旨集などに詳述されております。徳久氏を中心としたスタッフのお世話で、参加者一同金沢の学術・文化を堪能して年会は無事終了しました。

(医薬史蹟探訪ツアー配布資料の一つに山川浩司『全国医薬史跡ガイド』からの金沢市案内が入っていましたが、これは徳久氏作成の文書であり、山川先生の同書あとがきにその旨が記されております。)

平成 12 年から 10 年間、石川県薬剤師会会長として尽力された徳久氏は、会長職を退かれてからは少し気持ちのゆとりができたようで、電話での会話も薬史学関連の話が多くなりました。元々歴史を愛好していた彼は、ようやく好きな学問に取り組みると考え、実行していたようです。

徳久氏と最後に会ったのは、昨年 6 月 18 日であり、このときは 4 時間ほど話をして、その 90% は薬史に関するものでした。アメリカの薬学史書をインターネットで古書店から入手したこと、ラウォールやウルダングの世界薬学史を原文と翻訳で読んでいること、清水藤太郎先生の『日本薬学史』を熟読していること、またシェクスピアの戯曲「ロミオとジュリエット」に出てくる街の薬剤師の描写などについても触れていました。このときは、学校薬剤師の公用で上京されたのですが、現役の仕事をかかえて一体、いつ薬の歴史の資料に目を通していたのかと驚いたものです。このときの話に出てきた資料は 6 月 29 日付の手紙と共にレターパックで送られてきました。これらを読んで私なりの感想を書く仕事を果たせないまま、徳久氏は逝ってしまったのです。

とりわけ、徳久夫人も注目しておられたレミントン 21 版のアメリカ薬局史の翻訳はようやく緒についた所でした。二千頁余に及ぶ膨大な書籍「21st edition, Remington, The Science and Practice of Pharmacy」中、徳久氏が興味をもった章、第 1 部 Orientation の第 2 章 Evolution of Pharmacy から翻訳し始めた訳文は A4. 52 頁に及んだところで終わっています。何故これを訳したか、手紙には、「Pharmacy practitioner の視点で日本の薬局と薬剤師の歴史の変遷を見直してみたいのです」と記されております。翻訳をすることで多くを学び、そしておそらく生来の情熱を傾け目標に向かって推進してきた日本の薬局の分業の歩みを、世界の薬局の歩みを学びつつ、謙虚にかつ慎重に思考して文字に紡ぎ、数年あるいは十数年をかけて、徳久・『日本薬局史』を作りあげようと試みていたのではないかと思います。早い旅立ちが悔やまれてなりません。

(平成 24 年 1 月 15 日記)

----- 薬史レターへの投稿をお待ちしています -----

- ・薬史に関するエピソード(短編事項)
- ・薬学教育および研究に関する話題
- ・製薬技術についての歴史と話題
- ・病院あるいは街の薬局での薬剤師の業務の変遷などの回想
- ・文学作品(詩歌、俳句、川柳など)美術工芸品などにみられる、医薬に関係するもの、薬用植物の記事、図譜など
- ・薬史に関する博物館、史料館や展覧会などの紹介
- ・薬史に関する図書の紹介および資料など

(以上は薬史レター第 41 号 4 頁の投稿のヒントの要約です)

齋藤元護先生をしのぶ

北海道支部・副支部長 高田昌彦

1. 日本薬史学会北海道支部

本会理事、北海道支部長の齋藤元護先生は昨年9月1日急性腎不全で入院、一時回復に向かっておりましたが、願いも空しく享年85歳で12月1日永眠されました。その2週間前の11月14日には、看病中の奥様、容子様が急逝され(享年78歳)、先生はそれを知る由もないまま残されたのです。でも、お二人は直ぐに天国で再会されたことでしょうか。心からご冥福をお祈り申し上げます。齋藤先生は、当支部の誕生(平成16年11月)から最期まで、支部および会員のために奔走されました。その功績は実に大きいもので、要約すると次の三点になりましょう。

- ① **支部の発足**：以前から北海道内の会員には「北海道支部が欲しい」との強い思いがありましたが、会員のこの気持ちを温存し続け、そして一挙に実現させたのが先生でした。正に支部生み・育ての親です。
- ② **北海道薬学大会への加入**：支部の発足に伴い研究発表の場が必要となり、「北海道薬学大会」への加入をお願いしたところ、「薬史」部門が新設されました。いろんな薬業団体から成る薬学大会は、我々にとっては研究分野の拡大に繋がり、今後の発展が楽しみです、これも齋藤先生のお蔭です。
- ③ **「合同学術集会」**：札幌に「北海道医史学研究会」なる医療学術団体があり、先生はそれとの勉強会を始めるべく、「合同学術集会」を発足させました。当支部には大きな励みと刺激になっております。

このように先生は、支部の土台から、組織・運営に至る支部活動の方向性を既に創り上げて仕舞ったこととなります。私たちに残された課題は、これらを基に、今後、北海道の薬史を如何に発展させるか、です。齋藤先生、どうぞ私たちを見守り、お導き下さいますよう。

2. 学歴・研修歴・体験実習など

大正15年6月29日、札幌市にて出生。以後、円山小、札幌一中、第二高等学校(旧制)を経て、昭和24年3月、東京大学医学部薬学科卒業。

昭和22年5月～24年3月、合名会社丸一齋藤商店にて社員教育を受ける。

昭和24年4月～9月、東京大学医学部附属病院薬局にて研修。



3. 齋藤家を継ぐ

昭和25年7月～平成23年3月、(株)まるいち取締役等を経て代表取締役。

平成3年4月～平成7年4月、(株)バレオ 特別顧問に。昭和54年、アートギャラリーさいとう開設。平成3年、(株)バレオ設立に参加。平成7年、丸一ビルに「ラガレリア」竣工。同年、当ビル「丸一齋藤薬局」を改め「さいとう薬局」に。

4. 団体歴

(社)北海道薬剤師協会常務理事。(社)北海道薬剤師会副会長。(社)北海道薬剤師会公衆衛生検査センター常務理事。北海道医薬品卸商業組合理事。北海道医薬品卸勤務薬剤師会会長。日本

ボート協会理事。北海道・札幌漕艇協会理事・会長。一番街商店街振興組合理事長。(社)日本ビルヂング協会理事・副会長。札幌市商店街振興組合協議会常務理事。日本薬史学会理事・北海道支部長など。

5. 受賞歴

- 社会貢献賞(北海道、薬事功労)。 ○ 表彰(厚生大臣、薬事功労)。
- 藍綬褒章(薬事功労)。 ○ 旭日双光章(不動産業振興功労)。
- 北海道産業貢献賞(北海道、商店街功労)。

(平成24年2月1日)

第5回 日本薬史学会関西支部研修会の報告

日本薬史学会 関西支部世話人
宮崎 啓一、多胡 彰郎

さて、下記のとおり第5回目の日本薬史学会関西支部研修会を開催いたしました。

今回の研修会におきましては、くすりの道修町資料館館長の宮本義夫先生に「道修町と江戸時代の薬種仲買仲間」について、ご講演いただきました。

本講演では大坂本願寺の建立(1496年)、豊臣秀吉の大坂城築城(1583年)および大坂夏の陣(1615年)後の大坂城主 松平忠明による市街地復興の大坂の発達にはじまり、くすりのまち道修町の形成から薬種仲買仲間の役割、2007年4月6日に大阪市有形文化財に指定された道修町文書および道修町資料館の展示等について、取り上げていただきました。

記

日 時：2012年1月21日(土) 研修会：16:30～17:30(懇親会：研修会終了後～19:30)

場 所：くすりの道修町資料館 2階会議室 TEL 06-6231-6958

〒541-0045 大阪府中央区道修町二丁目1番8号 少彦名神社(神農さん)内

(大阪市地下鉄御堂筋線淀屋橋駅11番出口より徒歩約8分、堺筋線北浜駅4番または5番出口より徒歩約5分)

内 容：

1. 研修会(話題提供) (16:30～17:30)

講師：宮本 義夫 先生(くすりの道修町資料館 館長)

演題：「道修町と江戸時代の薬種仲買仲間」

2. 懇親会

研修会終了後～19:30

会費：5,000 円 (学生 1,000 円)

場所：ダイニングバー 「キキ」

TEL 06-6209-7760

〒 541-0045 大阪市中央区道修町二丁目 2 番 11 号

ベルロード道修町ビル B1

URL : http://www5b.biglobe.ne.jp/~freedom/kiki/k_main.html 新刊紹介

〔新刊紹介〕

山本郁夫 著 『日向の医人達一日向医薬事始め』

(株)ながと 発行 B5 版 223 頁 平成 24 年 2 月刊 定価 1,800 円

本書は九州保健福祉大学の山本教授が、共同研究者と「日向医薬事始め」と題して、薬史学会年会を始め、多くの学協会で発表してきた、この研究成果を十名の九州保健福祉大学および宮崎県の薬剤師会の有志の協力を得て、多数の図版を含めた著書として結実して出版されたものである。

日向の地は日本国の事始めの地として古代から知られてきた地である。その宮崎県を中心として南北朝の時代から江戸期、さらに明治初期に活躍した多数の医薬家とそれにまつわる事績を丹念に調べた著書である。これらの一部は、本会の評議員として多くの学協会で発表して注目されてきた。これらが本書に結実された事は喜ばしい。

本書は、第一章から四章にわたり日向の偉人を育てた土壌の背景から始まり、日向各藩の概説、延岡藩の藩医および侍医の系譜が記述されている。また第五章に日向の偉人達として、明の時代に来日して帰化した徐之遜および和人参を見出した何欽吉の事績から説かれている。評者も以前、宮崎市での香料テルペン討論会の折、何欽吉の事績を尋ねた事がある。また都城で活躍した三人の医家たち、医家であった頼山陽に師事した医家たち、廣瀬淡窓の厳しい塾の咸宜園に学んだ医家たち、またシーボルトに学んだ医家など、日向で活躍した多数の医家および儒者たちの事績は興味深く読める。

シーボルトに招かれて長崎で活躍した最初の外国人薬剤師といわれるビルガーなど多くの人々の事績がコラムに記述されている。しかし九大名誉教授の Michel さんの日独交流 150 年記念講演によると、それ以前にポルトガル人の薬剤師たちが来日していたという。

明治初期に漢方医術から研究室医学のドイツ医学の採用に大転換した時、東京大学病院薬局を設置のために来日したドイツ人薬剤師の事績は知られていない。このことはかつて医・薬史関係合同講演会の時、医薬史学の大先輩の故宗田一先生から幕末から明治初期に来日した外国人薬剤師の活躍業績を研究する必要があると指摘を受けた。しかし未だに果たせないでいる。幕末から明治初期に来日した外国人薬剤師の業務や研究活動について、日本の薬学は学ぶ姿勢が全くに無かったというほかは無い。この書には幕末からの多くの医家達の事績、特に明治の日向の医家、ビタミン発見の元になった海軍軍医総監の高木兼寛について述べられている。高木が学んだ臨床医学重視の英・仏医学を日本が採用していたら、日本の医薬学はかなり異なった道を歩んだに違いない。

本書には 25 にのぼるコラムが記述されている。また多くの写真、図版が収載されていて記述の理解を助け楽しいものになっている。ご一読をお勧めします。

(山川浩司)